

関係各位



「人並みに働けば十分」が過去最高(53.5%)に ～新入社員の“ほどほど志向・サバサバ傾向”強まる～

平成27年度 新入社員「働くことの意識」調査結果

公益財団法人 日本生産性本部 / 一般社団法人 日本経済青年協議会

公益財団法人日本生産性本部「職業のあり方研究会」（座長 岩間夏樹）と、一般社団法人日本経済青年協議会は、平成27年度新入社員2,026人を対象にした「働くことの意識」調査結果をとり纏めた。この新入社員の意識調査は、昭和44年度に実施して以来47回目を数え、この種の調査ではわが国で最も歴史のあるものである。主な調査結果は以下のとおり。

平成27年度新入社員「働くことの意識」調査結果のポイント

- 「人並み以上に働きたいかどうか」では「人並みで十分」がさらに増加（昨年52.5%→53.5%）し、「人並み以上に働きたい」（昨年40.1%→38.8%）を大きく上回り、過去最高となった。働き方のほどほど志向が強まっている。（3頁参照）
- 「どのポストまで昇進したいか」については、10年前（平成17年）と比べると、男性では社長という回答が大きく減り（27.0→17.4%）、部長と課長が増加している。一方女性では、専門職志向が低下（34.1→27.2%）するとともに、部長が増加する（7.2→10.5%）など、女性の昇進志向が高まる傾向が見受けられる。（4頁参照）
- 「デートか残業か」では「残業」（80.8%）「デート」（19.0%）と、プライベートな生活より仕事を優先する傾向だが、ここ数年は「デート派」が増加している。（4頁参照）
- 「就労意識」「生活価値観」「対人関係」では、全体として職場や仕事へのコミットメントの低下傾向や淡泊な印象が見られ、いわば「サバサバした」傾向が見受けられる。昨年度と比べて変化の大きな項目は以下の通り。（6・7・8頁参照）

	昨年度→今年度
－「同僚が残業していても自分の仕事が終わったら帰る」	…35.1%→41.5%（+6.4ポイント）
－「友人といるより一人にいる方が落ち着く」	…47.3%→51.9%（+4.6ポイント）
－「収入がよくななくても、やり甲斐のある仕事をしたい」	…62.9%→57.8%（-5.1ポイント）
－「すこし無理なくらいの目標をたてた方ががんばれる」	…74.3%→69.9%（-4.4ポイント）
－「面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない」	…54.9%→51.5%（-3.4ポイント）

【本件に関するお問い合わせ先】

公益財団法人 日本生産性本部（ワークライフ部）

〔担当：下村・中川 TEL:03-3467-7252/3409-1121（ワークライフ部）、E-mail:slr-info@jpc-net.jp〕

一般社団法人 日本経済青年協議会 〔担当：畔津(あぜつ)・梅田 TEL:03-3469-2381〕

全ての設問項目の属性別回答結果、過去47回の長期データを収録している本調査の報告書は7月初旬より「生産性労働情報センター」より刊行・頒布いたします

-大手書店・ネット書店、当財団売店・ホームページ(<http://www.jpc-net.jp/lic>)にて取扱い-

平成 27 年度新入社員「働くことの意識」調査の概要

I. 本調査の沿革

本調査は昭和 44 年（1969 年）以来、毎年一回、春の新入社員の入社時期に継続的に実施されてきた。新入社員を対象とするものとしてはもちろん、就労意識をテーマとする調査として他に例を見ない長期にわたる継続的な調査である。これまで 40 年以上にわたり、ほぼ同一の質問項目で実施されており、興味深いデータの経年変化が蓄積されてきた。

なお、昨今の終身雇用制の後退、若い世代の価値観の変化などを背景に、時代にそぐわない質問項目が散見されるようになってきたため、平成 13 年（2001 年）の実施にあたって、いくつかの質問項目を入れ替えた。もちろん、これまでの時系列データの資産的な価値を重視し、多少、最近の新入社員には難しいと思える質問も、極力残す方向でリニューアルをした。今年度はリニューアル後 15 回目の調査となる。

II. 調査の概要

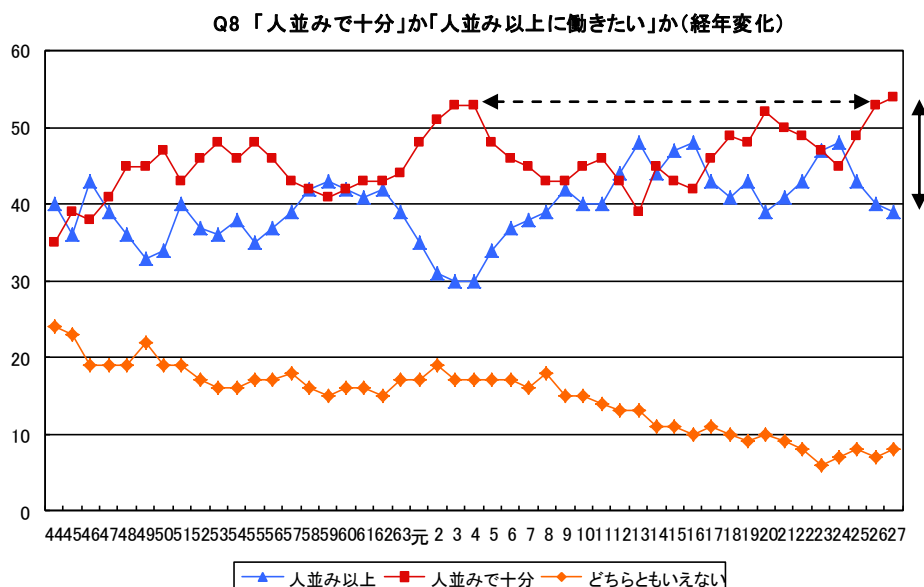
- (1)調査期間：平成 27 年 3 月 11 日から 5 月 15 日
- (2)調査対象：平成 27 年度新社会人研修村（国立オリンピック記念青少年総合センター）に参加した企業の新入社員
- (3)調査方法：同研修村入所の際に各企業担当者を通じて調査票を配布し、その場で調査対象者に回答してもらった
- (4)有効回収数：2,026 人（男性 1,319 人 女性 705 人 不明 2 人）
- (5)回答者プロフィール：

(%)

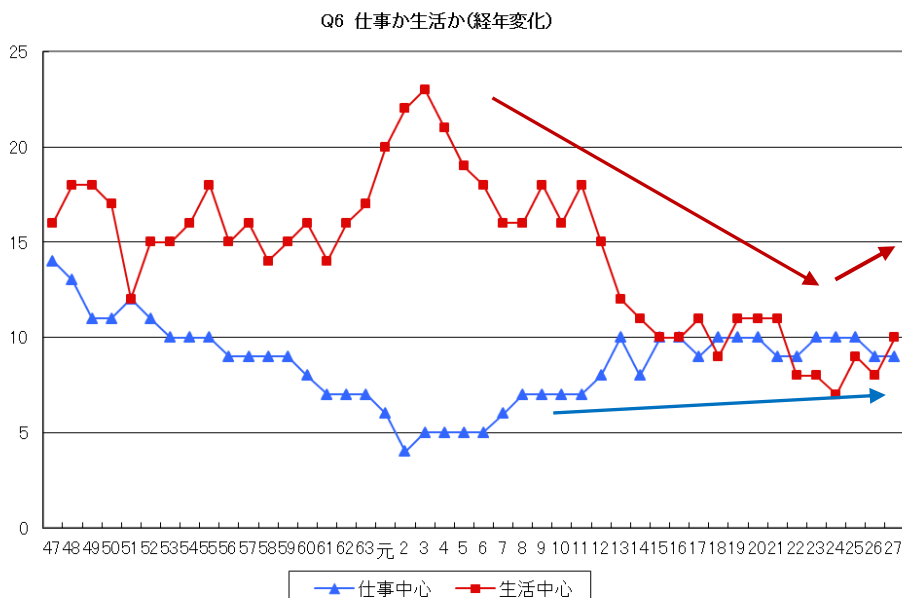
性別	最終学歴	業種	会社規模				
男性	65.1	普通高等学校	10.4	建設	4.3	99人以下	0.6
女性	34.8	職業高等学校	2.0	製造	17.0	100～499人	6.8
不明	0.1	工業専門学校	2.6	卸小売	19.2	500～999人	9.5
		短期大学	4.0	金融保険	3.1	1000～1999人	15.5
		4年制大学	55.2	不動産	0.0	2000～2999人	8.4
16歳以下	0.0	大学院	11.2	運輸通信	0.4	3000～3999人	7.6
17歳	0.2	専修・専門学校	12.1	電気ガス水道熱供給	1.3	4000～4999人	0.1
18歳	12.6	各種学校	0.5	外食産業	5.1	5000人以上	51.4
19歳	1.2	その他	1.8	情報関連サービス	13.5		
20歳	12.5	不明	0.1	その他サービス	33.3		
21歳	2.4			その他	2.7		
22歳	44.0						
23歳	9.5						
24歳	9.8						
25歳以上	7.6						
不明	0.1						

1. 「人並みに働けば十分」が過去最高(53.5%)に - “ほどほど志向” さらに高まる-

その年の新入社員の就職活動が順調だったか（大卒有効求人倍率 p 8 参考）で敏感に変化する項目に、「人並み以上に働きたいか」（Q8）がある。景況感や就職活動の厳しさによって、「人並み以上」と「人並みで十分」が相反した動きを見せる。特にバブル経済末期の平成2～3年には、「人並み以上」が大きく減り、「人並みで十分」が大きく増えたが、その後の景気低迷ともない平成12年以降入れ替わりを繰り返している。ここ数年では、平成24年に厳しい就職状況を背景に「人並み以上」が「人並みで十分」を逆転したが、平成25、26年度そして今年度と「人並み以上」が減少（42.7%→40.1%→38.8%）するとともに「人並みで十分」が増加（49.1%→52.5%→53.5%）し、バブル経済末期の平成3～4年を超えて調査来最高値となり、両者の差が開いている。会社に大きく貢献したいという意欲よりも、“ほどほど”に頑張るという志向が見受けられる。



一方で、「仕事中心か（私）生活中心か」（Q6）という設問では、常に「両立」という回答が多数を占め（グラフでは省略）、今年度は81.1%であった。残りの「（私）生活中心」と「仕事中心」という回答に注目すると、「（私）生活中心」という回答は平成3年をピークに下がり続け、平成22年に「仕事中心」が「（私）生活中心」を上回ってからその傾向が続いたが、今年度は久しぶりに「（私）生活中心」（9.5%）がごくわずかながら「仕事中心」（9.3%）を上回った。



2. 社長志向も専門職志向も過去最低水準

～専門職志向の低下とともに、女性の昇進志向が高まり始める～

「どのポストまで昇進したいか」(Q13)という問いに対して、最も多かったのは「専門職<スペシャリスト>」(20.4%)で例年通りだったが、その割合は過去最低を更新(19.9%)した昨年度とほぼ同水準である。

10年前(平成17年)と比べ、男性では社長という回答は大きく減り(27.0→17.4%)、部長と課長が増加している(13.7→20.2%と3.2→6.4%)。一方女性では専門職志向が低下し(34.1→27.2%)、その分、部長と課長という回答が増加し(7.2→10.5%と4.6→6.4%)、部長という回答が初めて2桁になるなど、女性の昇進志向がやや高まっている傾向が見受けられる。

<平成17年(10年前)との比較>

社長	18.1→12.6%	(男性 27.0→17.4%/女性 6.1→3.7%)	…男性-9.6ポイント/女性-2.4ポイント
重役	15.6→15.8%	(男性 21.9→20.7%/女性 7.2→6.8%)	…男性-1.2ポイント/女性-0.4ポイント
部長	10.9→16.8%	(男性 13.7→20.2%/女性 7.2→10.5%)	…男性+6.5ポイント/女性+3.3ポイント
課長	3.8→6.4%	(男性 3.2→6.4%/女性 4.6→6.4%)	…男性+3.2ポイント/女性+1.8ポイント
係長	1.0→2.0%	(男性 0.8→1.2%/女性 1.4→3.4%)	…男性+0.4ポイント/女性+2.0ポイント
専門職(スペシャリスト)	24.8→20.4%	(男性 18.0→16.8%/女性 34.1→27.2%)	…男性-1.2ポイント/女性-6.9ポイント

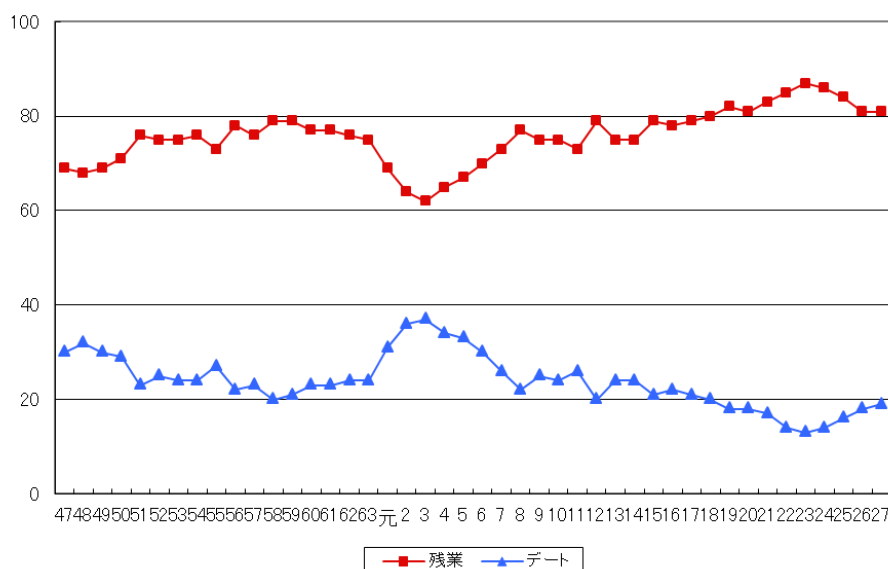
※上記ほかに、「どうでもよい」「役職にはつきたくない」「無回答」など

3. デートか残業か

～プライベートより仕事を優先が多数派～

「デートの約束があった時、残業を命じられたら、あなたはどうしますか」(Q15)という質問に対しては、「デートをやめて仕事をする」(80.8%)、「ことわってデートをする」(19.0%)と、全体としてはプライベートな生活よりも仕事を優先する傾向が引き続きうかがえるが、この数年はやや「デート派」が増加している。

Q15 デートか残業か(経年変化)



4. 「第一志望に入社」 ～平成 25 年度の過去最低からわずかに改善～

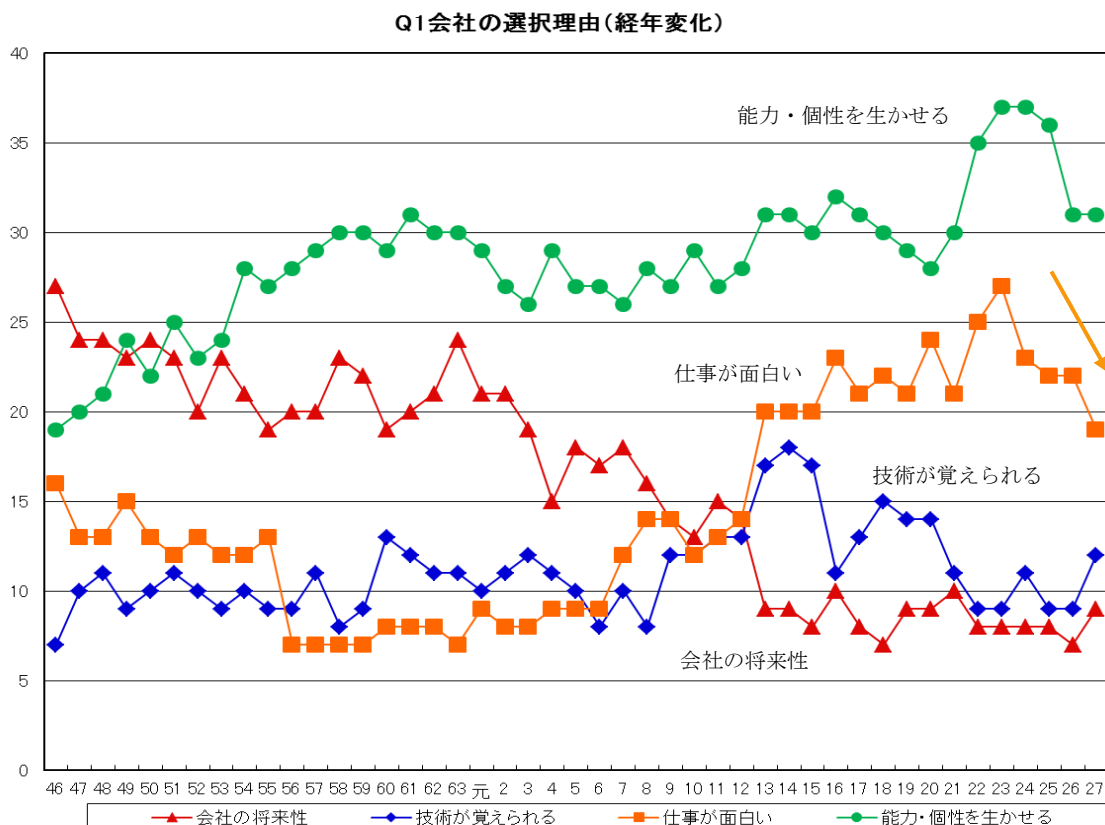
平成 20 年度入社からポスト氷河期に入ったと言われ、平成 21 年度には採用そのものは順調だったものの土壇場になって世界金融危機をきっかけとする経済不安から内定取り消しが出たことが話題となった。そして平成 22 年度、平成 23 年度は採用を絞った企業が多かったため、就職活動は非常に厳しくなった。そこで平成 21 年度から「第一志望の会社に入れたか」(Q33-1)を設問し、その推移は以下のとおり。

平成 21 年度 62.3 (57.2) %	平成 22 年度 55.2 (51.8) %	平成 23 年度 56.6 (51.5) %
平成 24 年度 60.9 (57.3) %	平成 25 年度 52.0 (46.3) %	平成 26 年度 55.0 (50.1) %
平成 27 年度 56.4 (53.0) %		※ () は四年制大卒

「第一志望の会社に入れた」という回答は、平成 24 (2012) 年 60.9%から平成 25 (13) 年 52.0%と大幅に減少し、設問設定以来で最低だったが、平成 26 (14) 年は 55.0%とわずかに改善され、今年も 56.4%とわずかに改善した。厚生労働省・文部科学省「大学卒業予定者の就職内定状況調査」によれば、4月1日現在の大卒者の内定率は、平成 23 (2011) 年に 91.0%と過去最低となった後、平成 24 (12) 年 93.6%→平成 25 (13) 年 93.9%→平成 26 (14) 年 94.4%→今年 96.7%とわずかずつ好転している。

5. 会社の選択理由 ～「仕事が面白いから」がこの数年反落～

「会社を選ぶとき、あなたはどのような要因をもっとも重視しましたか」(Q1)という質問に対して、最も多かった回答は「自分の能力、個性を活かせるから」(30.9%)だった。以下「仕事が面白いから」(19.2%)、「技術が覚えられるから」(12.3%)の順だった。平成以降、「会社の将来性」と入替るように増えた「仕事が面白いから」は、この数年低下が続いている。



6. 就労意識 ～職場や仕事へのコミットメントは低下傾向～

就労意識について 15 の質問文をあげ、「そう思う」から「そう思わない」まで4段階で聞いた (Q11) ところ、肯定的な回答 (「そう思う」と「ややそう思う」の合計) の比率は以下のような順になった。総じて、ポジティブないし積極的な態度が上位を占め、ネガティブないし消極的な態度が下位を占めている。昨年度とくらべ、全体として、職場や仕事へのコミットメントは低下する傾向が見受けられる。

昨年度との比較で 2.5 ポイント以上変動があったのは以下の通り。※ () 内は変動ポイント。

- (11) 職場の上司、同僚が残業していても、自分の仕事が終わったら帰る 35.1→41.5% (+6.4)
- (3) どこでも通用する専門技術を身につけたい 89.0→92.3% (+3.3)
- (8) 仕事はお金を稼ぐための手段あって、面白いものではない 32.7→35.7% (+3.0)
- (2) 面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない 54.9→51.5% (-3.4)
- (15) 海外の勤務があれば行ってみたい 46.3→43.7% (-2.6)
- (1) 仕事を生きがいとしたい 78.3→75.8% (-2.5)

なお、今年から新しい項目として「ワークライフバランスに積極的に取り組む職場で働きたい (16)」を追加したところ、肯定的な回答は 89.8%だった。ブラック企業問題が関心を集めているせいか、高い水準の数値となった。また、昨年追加された「できれば地元 (自宅から通える所) で働きたい (14)」は 64.8%から 65.0%と微増だったのに対し、「海外の勤務があれば行ってみたい (15)」は 46.3%から 43.7%に減少した。

就労意識のランキング Q11. 仕事についてのあなたの考えや希望についてお聞きします (%)

1位	(7) 仕事を通じて人間関係を広げていきたい	94.8
2位	(13) 社会や人から感謝される仕事がしたい	93.3
3位	(3) どこでも通用する専門技術を身につけたい	92.3
4位	(16) ワークライフバランスに積極的に取り組む職場で働きたい…新設	89.8
5位	(9) 高い役職につくために、少々の苦勞はしても頑張る	85.0
6位	(12) これからの時代は終身雇用ではないので、会社に甘える生活はできない	78.4
7位	(1) 仕事を生きがいとしたい	75.8
8位	(6) 仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる	66.5
9位	(14) できれば地元 (自宅から通える所) で働きたい	65.0
10位	(2) 面白い仕事であれば、収入が少なくても構わない	51.5
11位	(15) 海外の勤務があれば行ってみたい	43.7
12位	(11) 職場の上司、同僚が残業していても、自分の仕事が終わったら帰る	41.5
13位	(4) いずれリストラされるのではないかと不安だ	40.2
14位	(8) 仕事はお金を稼ぐための手段あって、面白いものではない	35.7
15位	(10) 職場の同僚、上司、部下などとは勤務時間以外はつきあいたくない	22.8
16位	(5) いずれ会社が倒産したり破綻したりするのではないかと不安だ	21.8

※ () 内の数字は、調査項目の質問番号

7. 生活価値観 ～仕事へのやりがいを見出しにくい傾向～

一般的な生活価値観について全部で16の質問をした(Q30)。四段階のうち「そう思う」「ややそう思う」の合計を順位づけると、ここでも積極性を示す項目が上位を占め、消極性を示す項目が下位を占めている。

- 昨年との比較で2.5ポイント以上変動があったのは以下の通り。※()内は変動ポイント。
- (16) あまり収入がよくななくても、やり甲斐のある仕事がしたい 62.9→57.8% (-5.1)
- (12) すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる 74.3→69.9% (-4.4)

「世の中はいろいろな面で今よりもよくなっていくだろう(18)」が2012年48.2%から13年56.5%へ増加し、14年さらに増加して58.8%になったが、今年はわずかに減少し58.2%だった。

「世の中はいろいろな面で今よりも昔のほうがよかった(19)」が2012年45.8%から13年40.1%に減少し、14年さらに減少して37.0%となったが、今年はわずかに増加して37.4%となった。なお「自分はいい時代に生まれたと思う(20)」は昨年の75.5%から77.3%に増加した。

「人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけることが大切だ(14)」が1位となったが、前出の就労意識(Q11)でも「仕事を通じて人間関係を広げていきたい(7)」(94.8%)、「仕事をしていくうえで人間関係に不安を感じる(6)」(66.5%)といった結果があり、新入社員にとって職場の人間関係への期待や不安が見てとれる。

生活価値観のランキング Q30. あなたのいろいろな考え方や経験についてお尋ねします (%)

1位	(14) 人間関係では、先輩と後輩など上下のけじめをつけることは大切なことだ	88.5
2位	(22) 将来の幸福のために、今は我慢が必要だ	84.6
3位	(23) 他人にはどう思われようとも、自分らしく生きたい	81.4
4位	(13) 明るい気持ちで積極的に行動すれば、たいていのことは達成できる	80.8
5位	(20) 自分はいい時代に生まれたと思う	77.3
6位	(12) すこし無理だと思われるくらいの目標をたてた方ががんばれる	69.9
7位	(15) たとえ経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らす方がいい	61.9
8位	(21) 冒険をして大きな失敗をするよりも、堅実な生き方をするほうがいい	61.4
9位	(17) 企業は経済的な利益よりも、環境保全を優先するべきだ	58.5
10位	(18) 世の中は、いろいろな面で、今よりもよくなっていくだろう	58.2
11位	(16) あまり収入がよくななくても、やり甲斐のある仕事がしたい	57.8
12位	(11) リーダーになって苦勞するよりは、人にしがっている方が気楽でいい	50.8
13位	(9) 自分と意見のあわない人とは、あまりつきあいたくない	49.4
14位	(10) 世の中、なにはともあれ目立ったほうが得だ	49.0
15位	(8) 周囲の人と違うことはあまりしたくない	42.6
16位	(19) 世の中は、いろいろな面で、今よりも昔のほうがよかった	37.4

※()内の数字は、調査項目の質問番号

8. 対人関係 ～一点集中、一人志向の強まり～

Q30では、対人関係について三つの質問をしている。広範囲にわたる対人関係よりも一点集中型の対人関係を重視する意見が全体の八割を占め、昨年比でも3ポイント近い増加である。他の調査結果で若い世代には「一人志向」が見られるという報告もあるが、本調査では全体の半数強にこの傾向が見られ(2)、昨年比でも5ポイント近く増加した。本音のつきあいを避ける傾向(3)も半数以上に見られ、全体として少子化、核家族化時代に生まれ育った世代らしい「あっさり」型の対人関係も読みとることができる。

昨年との比較で2.5ポイント以上変動があったのは以下の通り。※()内は変動ポイント。

- (1) 浅く広くより一人の友人との深い付き合いを大事にする 76.5→79.3% (+2.8)
- (2) 友人というより、一人であるほうが落ち着く 47.3→51.9% (+4.6)

対人関係のランキング Q30. あなたのいろいろな考え方や経験についてお尋ねします (%)

順位	内容	割合 (%)
1位	(1) 浅く広くより一人の友人との深い付き合いを大事にする	79.3
2位	(3) 相手とは意見が違っても、その場ではあまり反論しない	62.3
3位	(2) 友人というより、一人であるほうが落ち着く	51.9

<参 考>

グラフ：「人並みで十分」か「人並み以上に働きたい」か（経年変化）

